明日香皇女の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首　并せて短歌

一九六番

飛ぶ鳥の　明日香の川の　上つ瀬に　石橋渡し　下つ瀬に　打橋渡す　石橋に　生ひなびける　玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる　打橋に　生ひをれる　川藻もぞ　枯るれば生ゆる　なにしかも　我が大君の　立たせば　玉藻のもころ　臥やせば　川藻のごとく　なびかひの　宜しき君が　朝宮を　忘れたまふや　夕宮を　背きたまふやうつそみと　思ひし時に　春へには　花折りかざし　秋立てば　黄葉かざし　しきたへの　袖たづさはり　鏡なす見れども飽かず　望月の　いやめづらしみ　思ほしし君と時どき　出でまして　遊びたまひし　みけむかふ城上の宮を　常宮と　定めたまひて　あぢさはふ　目言も絶えぬ　しかれかも　あやに哀しみ　ぬえ鳥の　片恋づま　朝鳥の　通はす君が　夏草の　思ひしなえて　夕星の　か行きかく行き　大舟の　たゆたふ見れば　慰もる　心もあらず　そこ故に　せむすべ知れや　音のみも名のみも絶えず　天地の　いや遠長く　偲ひ行かむ　御名にかかせる　明日香川　万代までに　はしきやし　我が大君の　形見にここを